The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	楚辞学会日本分会
Author(s)	矢田, 尚子
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 15-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58660
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　夜号（総六十一号）平成二十七年十二月　一五―一七頁

〔研究会通信〕

楚辞学会日本分会

矢田尚子

『楚辞』の日本への伝来は、藤原佐世『日本国見在書目』に『楚辞』関係の文献が六種類見えることから、平安期以前であると考えられる。しかし楚辞研究となると、日本における萌芽が確認されるのは江戸期に入ってからであり、さらにそれが大きく進展したのは、西村天囚の蒐集による所謂「楚辞百種」（懐徳堂文庫蔵）の存在が示すように、明治期以降であろう。そしてその後、それら江戸・明治期の研究成果をもとに、藤野岩友、星川清孝、目加田誠、竹治貞夫ら日本の優れた研究者による楚辞研究が行われたのである。

しかしながら、日本における楚辞研究は従来、研究者が個人で取り組むという傾向が強く、研究会や学会を立ち上げて組織的に進めるという方策は講じられてこなかった。そのため、すでに二千年以上の歴史と伝統を持ち、現在、会員数三〇〇人以上の「中国屈原学会」を有する中国の楚辞研究とは、研究推進力や影響力といった点で比較にならない。

中国屈原学会が中心となって隔年で開催される「楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会年会」への参加の際に、そのことを強く痛感された故石川三佐男氏（秋田大学名誉教授）は、楚辞研究に関する学術的情報を共有しながら、互いに切磋琢磨する場としての会を結成すべく、日本国内の楚辞研究者に呼びかけをされた。そして、その趣旨に賛同した数名により、二〇〇五年の夏、「楚辞学会日本分会」が発足し、年に一度、日本中国学会の開催期間を利用した例会の場やメール、ホームページ上で、楚辞研究に関する情報交換をすることになったのである。

発足当時のメンバーは、石川三佐男氏（当時秋田大学教授）、谷口洋氏（当時奈良女子大学教授）、大野圭介氏（富山大学准教授）、田宮昌子氏（宮崎公立大学准教授）、吉冨透氏（青山学院大学非常勤講師）、野田雄史氏（当時佐賀大学非常勤講師）、矢田尚子（当時東北大学大学院博士後期課程）であった。なお、会の発足に当たり、事務局長を石川氏に、事務副長を田宮氏に、事務を野田氏にお願いすることにして活動を開始したが、二〇一四年二月に石川氏が急逝されて以降、現在に至るまで、事務局長の席は空席のままである。

「楚辞学会日本分会」という名称は、「楚辞学会」なるものが前提として存在するような印象を与えるであろうが、実のところ、現在そうした学会は存在しない。上掲の「楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会年会」に関連する学術的活動の総体を指して便宜的に「楚辞学会」という名称を用いているにすぎず、また、楚辞学会日本分会が中国屈原学会の下部組織であるというわけでもない。楚辞や楚文化に興味を持ち、上記の趣旨に賛同する有志の情報交換の場であるため、会費の徴収や学会誌の発行なども行っていない。

会を発足してみてわかったのは、一口に「楚辞研究」といっても、メンバーは伝世文献を主に用いて研究を行う者、出土資料研究を主としてきた者、音韻学からのアプローチを試みる者など、さまざまな分野・方法論にわたっているということであった。そこで、分野や方法論の枠を超えて、それらを有機的に融合させた研究を行うことはできないかという認識に至り、二〇〇九年、文部科学省科研費・基盤研究（B）一般「中国古代戦国期における楚文化の学際的研究―中原との関わりに着目して―」（研究代表者は大野圭介氏）という科研費プロジェクトを開始した。メンバーには、研究分担者として石川氏、澁澤尚氏（福島大学准教授）、谷口氏、田宮氏、が、また、海外研究協力者として黄霊庚氏（浙江師範大学教授）、徐志嘯氏（復旦大学教授）、湯漳平氏（漳州師範学院教授）が、国内研究協力者として田島花野氏（当時東北大学大学院博士後期課程）、中村貴氏（当時華東師範大学博士研究生）、野田氏、吉冨氏、矢田が参加し、その成果は、大野圭介主編『『楚辞』と楚文化の総合的研究』として、二〇一四年に汲古書院より刊行されている。

その後、本研究会では再び科研費プロジェクトに挑戦することとなり、今度は大きく視点を変え、日本の江戸・明治期における楚辞学の萌芽期に注目した研究を行うことにした。

江戸・明治期の楚辞学研究の成果は、漢学の優れた知見を持つ学者たちの手に成るものであったにも関わらず、写本や手稿本という流布形態ゆえに、中国はもとより日本の研究者の目にさえ留まりにくい状況にある。そこで、そうした資料を活字データ化して公表するとともに、その内容を精査するためのプロジェクトチームを結成することにしたのである。これは、江戸・明治期における日本漢学者の楚辞学を総合的・体系的にとらえ、その学術的価値を明らかにしたいという、石川氏が長年抱いておられた構想に基づくものである。幸いこの計画は二〇一三年度の基盤研究（C）一般「日本楚辞学の基礎的研究―江戸・明治期を対象に―」（研究代表者は矢田尚子）として採択され、現在も継続中である。具体的には、蘆野東山『楚辞評園』、龜井昭陽『楚辞玦』、北越董鷗洲『王註楚辞翼』、西村天囚『屈原賦説』・『楚辞纂説』を活字データ化し、その内容を分析して楚辞研究史の中に位置づけようというものである。メンバーには、大野圭介氏、谷口洋氏（東京大学教授）、田宮昌子氏、矢羽野隆男氏（四天王寺大学教授）に研究分担者として、荒木雪葉氏（西南学院大学博士研究員）、田島花野氏（東北大学助教）、野田雄史氏（久留米大学非常勤講師）、前川正名氏（台湾・国立高雄餐旅大学助理教授）に研究協力者として加わっていただいている。

中国における近年の出土考古文献の発見は、楚辞研究の分野にも続々と新たな資料をもたらしているが、同じく「埋もれた資料」である江戸・明治期における日本楚辞学の資料は、出土考古文献と同様、国内外の楚辞研究者に新たな視点を提供すると推測される。また、日本における楚辞受容の様相を明らかにするのみならず、日本漢詩における日本楚辞学の影響、江戸期に官学とされていた朱子学と日本楚辞学との関係など、日本の文学史・思想史研究においても新たな発見をもたらす可能性を秘めている。

なお、このプロジェクト研究成果の一部は、二〇一五年七月二五日から二八日にかけて淮陰師範学院で開催された二〇一五年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第十六届年会に参加したメンバーによって発表された。

＊楚辞学会日本分会のホームページＵＲＬは、

http://homepage3.nifty.com/lisai/soji/index.htm